

下町田のジャズ喫茶

〜17〜

久野ちゃんの始めた戦後名古屋での草分けのジャズ喫茶「コンボ」はいつもお客でいっぱいだった。定期的に恵まれていたとはいえず、それを見抜いた彼に先見の明があった。つまり、敗戦の混乱がようやくおさまって、アメリカンポップスが生活に密着した日常的なものになりかけていたと言えらるからだ。

もちろん、まだフォークもロックも登場せず、ジャズが若い人たちの興味の対象だったということもある。

そんな流れを受けて、今も続く新栄町の「アスター」とか、伏見の「グッドマン」といったジャズを聴かせる店が次々にオープンする一方、生演奏の店も相次いで誕生した。まだ名城大学の学生だった和田直(数々のLPで日本一のブルースギターとつたわれ、現在もライブスポット「ココ」のオーナーとして現役で活躍中)と初めて知り合

った米の「ジャズコーナー」、珍しくディキシランドジャズの聴けた柳橋の「安全地帯」、若いミュージシャンたちの研さんの場となった名駅前の「ラテンクォーター」などがそうだ。



来日したフィリー・ジョー・ジョーンズ(左端)とセッションする和田直(右端)＝レストラン・コンボで

名古屋で次々 若い才能開花

とは言つものの、久野ちゃんや僕が大好きな「ピバップ」がどこでも聴けるといって訳じゃない。何しろこの音楽には特に高度なテクニックが要求される上、ダンスに向かないからお店でも歓迎されな

いんだね。欲求不満の久野ちゃんは、たまりかねてか、職にはありつけないがモダンジャズ一筋に成り上がった。早くもその才能の芽を感じさせたのだ。

一方の福島は、いたつてのんびりした性格で欲がない。さっぱり仕事がないのを心配した久野ちゃんと僕は、彼をオケストラに売り込んだ。当日、オンボロの格好でおまけにゲタばきで現れたのはあされたが、バンドリーダーの方は、バカにされたと思つたに違いない。僕らの顔を立ててか、一曲吹いてみると言われてはつとしたが、そのプレーに目をむいた顔―痛快だったなあ。

ある日の「ジャムセッション」でのこと。ふらりと現れたのが「コンボ」に居ついたあのフォーテン少年だった。だがひとたびスティックを握るや、ばらばらに見えたバンドが突然見違えるように引きしまり、全員の玉と化したようにスイングし始めたではないか。

僕が冗談まじりに「安岡一家」と呼ぶほど結束の固い「ソウルノーツ」には、京都の高校を出たばかりですば

(内田 修)